

江戸時代の日本は「東アジア化」したのか 「日本化」したのか

日本史学専修 深谷 克己

一九三九年に北島正元は『日本近世史』（三笠書房）で、中世まで日本は順調に発展してきたが、近世には政治が鎖国を強制したために反動と停滞の色彩を帯び、以後の排外主義の要因になったと書いている。一九四七年に児玉幸多は『江戸時代の農民生活』（大八洲出版）で、農民は年貢生産のために働き、連座・監察・密告制度などで苛酷な環境にいたことを強調し、封建思想を脱却する必要性を説いている。こうした批判と課題の意識を持って、「戦後歴史学」の近世史研究は、一方では「世界史の基本法則」論に立って社会経済史的に幕藩体制論を組み立て、他方で変革主体を探って村方騒動・百姓一揆論を深めた。

六〇年代に研究に加わった私は百姓一揆研究に励んだが、方法は非和解論的な階級闘争史であり、一揆は反封建闘争と理解した。しかし徐々に百姓論に関心が移り、一揆論を修正しはじめた。百姓一揆は「打ちこわしをとまなう強訴」であり、打ちこわしは民衆間の制裁の発現で、強訴は徒党による訴訟である。一揆は、違法だが規範性のある実力行使として、領主恩頼感を持つ「御百姓意識」に立って「百姓成立」を求める「仁政責務」追求闘争ではないかと考え始めて「百姓成立」を求めた。

二〇〇九年度早稲田大学史学会大会報告

めた。支配イデオロギーは虚偽イデオロギーではなく、いわば社会的約定とでも言うべきものと考えた。

八〇年代には、高度成長によるハイテクノロジー、情報社会化という環境変容だけでなく、研究者の世代交代が進み、生活実感の相違も合わせて、グランドセオリーの「発展段階論」の牽引力が弱まり、近世史研究の課題意識の変化から研究が多様化し始めた。個別分散化に見える諸研究に通底するのは、社会の自律性を探る方向であった。それは日本社会の現代的課題に対応しようとする姿勢は持っていたが、九〇年代の世界変動を見据えて近世史像をつくりかえるものではなかった。

日本社会の高度成長、東側社会主義世界の崩壊という二つの変動は、ただ課題の多様化、対象の多様化、自律性の取り出しで応じることではならず、あらためて「戦後歴史学」の検討と合わせた近世史研究の方向性の模索を求めている。それは、一つは「革命不達成観」からの脱却、もう一つは「脱了的歴史認識」からの脱却という課題である。明治維新を革命成らずとする見方は、日本史のなかの変革的刻印を十分に取り出すことを妨げてきた。他方、友好・切斷双方の立場からの「東アジア」論が声高になってきているが、日本がどのようにアジアであるのかは、歴史的に検証されていない。日本をふくめた東アジアがどのような「歴史的構造体」であるかは、解き明かされていない。

試論として、「交流様式」論からは中国史西嶋定正の「冊封朝貢

システム」論、世界史ラインハルトツエルナーの「相互交流システム」論がある。「社会様式」論からは、朝鮮史宮嶋博史が「小農社会」論を論じているが上部構造について日本異質論を指摘する。日本史では、幕藩体制の構造的特質論を強調した佐々木潤之介が遺稿著書では、一六世紀以降のアジア・ヨーロッパ・中東は隷農制を共通の基盤に持ち、これに結びつけられてアメリカ・アフリカが立ち上がってくると書き残している。隷農とは「小農」である。

東アジア世界論では、日本異質論を克服しなければならぬ。また交流の盛んさの証明だけでなく、社会の質として文明的域圏にあることを証明する必要がある。脱アジア的歴史認識の大元は、「戦前歴史学」の「日本資本主義発達史講座」である。「戦後歴史学」は、日本の前近代史を「領土制発達段階論」で論じ、それが資本主義発達史につながられた。領土制から資本主義生成、産業革命へとこの発展段階論が論じられ、同時に明治維新での独立が強調された。二つともアジアでは日本だけが達成し、他は「停滞」したとされ、その要因が追究された。日本はヨーロッパ並みというのではなく、進んでいる面は西欧並み、遅れている面はアジア並みとされた。

近世日本を東アジアに組み込むうえでの共通分母は曖昧だが、私は「政治文化」を重視する。それを軸に「東アジア法文明圏」を構想することが最も可能性が高いと考える。この政治文化は「仁政イデオロギー」であり、その中核は「民本徳治」であり、この点で東アジア諸社会は共通の土台に乗っていた。それは君主制下の治者思

想だが、儒教的諸徳目をともなって社会の全域に浸潤した。

この意味での日本の「東アジア化」は、近世に最も濃厚に浸潤した。それが中華王朝、朝鮮王朝、琉球王朝などの普遍主義的な「文明化」圧力であったかぎり、反動として国学に代表される「日本化」の力が強まるのも必然であった。この意味で近世日本では、「東アジア化」が進行し、かつ「日本化」が進行した。より内容に踏み込んだ「東アジア法文明圏」論については、次の機会に譲りたい。

コメント

宮内庁書陵部 真辺 美佐

一はじめに 私の研究の背景

私が最初に自由民権運動に接したのは、高校生の時、オープンしたばかりの高知市立自由民権記念館を観覧した時である。同館は高知市制百周年にあたり一九九〇年にオープンしたが、安在邦夫先生はじめ諸先生・先輩方が一九七〇年代後半から展開してきた「自由民権百年運動」の影響を強く受けて開館したものであった。

この百年運動の功績は大きく二つある。一つは、一般の人々にまで研究の裾野を広げたことである。全国の市民によって地域史料を用いた研究が深められ、中央側の資料からは見えてこない、地域の人々の民権運動への関わり方が見えてくるようになった。各地域で、